



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

四旬節第1主日 C年 (2022年3月6日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：申命記 26章4—10節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 10章8—13節

福音朗読：ルカによる福音書 4章1—13節

しじゆんせつ 四旬節をむかえるにあたって

四旬節とは、復活祭まえの四十日という意味です。灰の水曜日はマタイ6章からイエスが「祈り、断食、施し」について教える箇所が読まれます。これらは回心のわざとして重んじられましたが、イエスは祈り、断食、施しをするとき、心が本当にどこを向いているのかを問いかけて、回心とは自己中心の心を神と隣人に向けていく「心の方向転換」なのです。現代でも教会は、この四旬節に「祈り、節制、愛の行い」を呼びかけています。大斎・小斎が定められているのはこの灰の水曜日と聖金曜日ですが、他には何もしなくてよいというのではなく、一人ひとりが自分なりに本当に意味のある仕方で四旬節を過ごすことが求められているのです。

しゆ すぎこし 四旬節＝主の過越

四旬節はキリストの受難と十字架を思い起こし、それに生きる期間です。教会は、受難と復活を合わせて、「キリストの過越秘義」(myserium paschalis) と呼びます。これこそが神の救いのわざの中心であり、教会の存在そのものもこの秘義に負っているからです。すべてのキリスト者の生き方、生活はこの過越秘義にあずかることによって始まります。そしてさらに一層、密接に、深くあずかることを目指すのです。第二ヴァチカン公会議は次のように記しています。「こうして、人は洗礼によってキリストの過越の秘義につぎ木されてキリストとともに死し、ともに葬られ、ともに復活する。そして、子となる霊を受け『その霊によって、アッバ、父よと呼び』、父の求める真の礼拝者となる。」(典礼憲章6)

やみ かいほう いこう 過越、神による闇から光への解放、移行

ここで少し過越について考えてみましょう。過越(pascha)にはもともと「飛び越える」とか「通り越す」という意味があります。イスラエルの人々がエジプトで奴隷として苦しんでいたとき、主なる神は、エジプト人の家を打ちながらも、イスラエルの人々の家は「通り過ぎ」ました。これが主の「通過」、「過越」です(出エ

ジプト記 12 章)。この主の過越 (pascha) によってイスラエルの人々は奴隷から解放されたのです。それは奴隷から自由への移行でした。また神の人間を救うための介入でもありました。イスラエルの人々は代々、この過越祭を大切に祝ってきました。なぜなら過越祭は、自分たちの苦しみを喜びへと変えてくださるために介入してきてくださった神の愛と神の力を記念するものだったからです。

神の力が無力な人々を抱き上げ、運ぶのです。ここでは、人々は受け身です。ただ神の力のなすがままに委せ、運ばれて、解放されてゆくのです。このようにして「過越」の理解は次第に深まってゆきました。すなわち、無力で苦しむ人々が、神の手によって闇の世界から光の世界へと脱出してゆくこと、移行してゆくこととして「過越」は理解されていったのです。

過越祭でイスラエルの人々が思い起こそうとしたのは闇と奴隷の状態から解放され、自由と光、生命の世界に、神の愛と力によって運ばれてゆくことだったのです。

新しい過越

新約聖書では、ヨハネ福音書がイエスの十字架の出来事を、新しい過越と理解しようとしています。ヨハネ福音書はイエスの十字架の出来事をイスラエルの人々の過越祭と関連して描いています (11,55;13,1;18,28;19,14,42)。イエス自身も「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。」(13,1) とあるように、十字架の死を闇の世界から、御父の世界へと移るときだと理解しています。それによってすべての人を天の御父のもとへと引き上げるためです (12,32)。

かつて神が人々を抱き上げ、シナイ山で神との一致へと運んできたように、こんどはイエスが、ご自分の肩の上に全人類を乗せ、御父の光と生命の世界へと運んでゆくのです。イエスの人間性に全人類が包まれ、イエスが地上からあげられることが、そのまま全人類が御父のもとへと運ばれたことにつながるのです。

罪を犯しても、そして無力で弱り果て、惨めになった人間を、怒ることなく、復讐することもなく、償いを要求することもなく、そんな人間の姿を「見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻」(ルカ 15,20) する父の姿がそこにはあります。闇の世界から光の世界へと、死の世界からいのちの世界へと運んでくださる神の愛がそこにはあるのです。

十字架はまさにその過越の出来事を記念するために立ち続けるのです。

神へと目を向ける (回心)

第一朗読：申命記 26 章 4 - 10 節

テーマ：「乳と蜜の流れる土地」へ導いてくださる神への感謝

「わたしの先祖は、滅びゆく一アラム人であり」(5 節)に注目してください。フランシスコ会訳を見てみると「わたしの先祖はさすらいのアラム人でした」となっています。取るにたりない弱い一族を神さまは見捨てずに「エ

ジプトから導き出し(8節)、「乳と蜜の流れるこの土地を与え(9節)られたと言う事実は驚愕に値します。なぜ、さすらいのアラム人でしかなかったこの民を神さまは選ばれ、保護し、導いたのでしょうか。それは神さまだけがご存知の救いの想い、救いのデザインがあったからです。

ここまで神さまが導いてくださった、すべては神さまのおかげだと深く実感できるならば、当然のようにわたしたちも「滅びゆくアモリ人」にすぎないのですとへりくだります。神さまの偉大さを知れば知るほど、人間は自分のちっぽけさを実感するのです。そして、神さまに感謝するようになるのです。

第二朗読：ローマの信徒への手紙 10章 8－13節

テーマ：「イエスが主である」と言い表せるためには神さまのこぼへの信頼が必要

第二朗読の冒頭、8節にある「御言葉はあなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある」という『申命記』30章12－14節をまとめた形での引用を心に留め、記憶しましょう。ここでもフランシスコ会訳に頼ってみると「言葉は、あなたの近くにあり、あなたの口、あなたの心にある」となっています。

「言葉」とは、神さまのこぼです。そして、こぼをかたる神さまそのものを指します。神さまは、こぼを通してわたしたち一人ひとりの近くにおられるです。神さまのこぼとは人となった「御言葉」である主イエス・キリストです。主イエス・キリストはわたしたち一人ひとりの中におられるのです。

パウロの宣教は、こぼを伝える宣教です。伝えられたいのちのこぼを心で信じて、口で言い表すのです。

福音朗読：ルカによる福音書 4章 1－13節

テーマ：主に仕える生き方は誘惑を試練へと変える。

今日の福音の箇所構造を見てみると「誘惑」という単語が最初と最後に登場し(1－2a、13節)、その間に三つの誘惑が記されています(2b－4、5－8、1－12節)。三つの誘惑を細かく見てみると共通のものがあります。①状況の設定(2b、5、9a節)、②悪魔の挑発(3、6－7、9b－11節)、③イエスさまの返答(4、8、12節)です。そして、イエスさまの答えはすべて『申命記』から採られています(申8章3節、6章13節、6章16節参照)。いずれも出エジプトの後のイスラエルの民の生活と関連する箇所です。とりわけ、二番目と三番目のイエスさまの答えは、シェマーの祈り(6章4－9節)の後でのイスラエルの民の不忠実さと関連した箇所からの引用です。ですから、イエスさまは誘惑に対して、神のこぼを用いて打ち勝っているのです。

イエスさまは「荒れ野の中を、霊によって引き回され」ます。『マタイによる福音書』によれば「悪魔から誘惑を受けるために、霊に導かれて荒れ野に行かれた」(マタ4章1節)とありますから、イエスさまが神の霊と共に荒れ野にいたことが『ルカによる福音書』では強調されます。荒れ野には二重の意味があると考えてよいでしょう。荒れ野は洗礼者ヨハネが神のこぼを聞いた場所であり、神との出会いの場です。と同時に、今日の福音にあるように霊に引きずり回されて試みを受ける場所でもあるのです。

最初の誘惑は40日間の断食を覚えたイエスさまへのささやき声です。40はモーセが40日40夜にわたって断食をした出来事と響き合います(出34章28節、申9章9、18節参照)。イエスさまは奇跡を起こして、石をパンに変えて空腹を満たすことができましたでしょう。しかし、「人はパンだけで生きるものではない」と『申命記』の一節で答えます(申8章3節)。イエスさまは自分の必要を満たすためだけに奇跡を行いません。神さまのことばに信頼して、神さまに対する無条件の信頼と完全な服従の態度を示しました。

二番目の誘惑は「権力」と「繁栄」を与えよう、そして「拝むなら」という条件をつけます。イエスさまの答えは「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」(ルカ3章8節、申6章13節参照)です。イエスさまは自分自身で権力をもって支配することを拒否します。神さまに対する従順な姿勢を貫き通します。

三つ目の誘惑では悪魔はイエスさまを高いところに連れて行き、「神の子なら」(ルカ3章9b節)飛びおりてみるとそそのかします。きっと神さまが助けてくれるだろうからというのです。これまでの二回の誘惑とは違って悪魔は神さまへの全幅の信頼について語る詩編の一節を使って誘惑します(詩91編11-12節)。悪魔も神のことばを使って自分の行為を根拠づけようとしているかのようです。悪魔の誘惑は巧妙なものになったのです。

それに対してイエスさまの答えは「あなたの神である主を試してはならない」(ルカ3章12節、申6章16節参照)でした。神の子であるイエスさまは、神さまを試すことはしません。むしろ、神さまに対する従順な態度であり続けます。イエスさまが十字架上で父なる神さまに従順であり続け、自分で自分を救おうとはしなかったことを思い起こさせます(ルカ23章35-39節参照)

イエスさまにとって、最大の誘惑は「神を試みる」ことです。神の子だからこそ、神さまを意のままに扱うことができると考えてしまうと、神さまを試みてしまい、自分自身が神さまようになってしまいます。悪魔もまた、イエスさまの心の深いところに入っていました。最初は空腹という外面的なこと、二番目は権力と繁栄という人のところにある欲望のこと、そして三番目は聖書のことばを巧みに操りながらの自分が神さま以上のものになろうとすること、といった具合に人間の内面にある悪意に語りかけていったのです。

朗読箇所の一節に注目してください。「悪魔はあらゆる誘惑を終えて、時が来るまでイエスを離れた」(ルカ4章13節)。ここでの「時」はイエスさまの受難の「時」を指しています。ここでも「自分を救ってみろ」(23章36節)と誘惑を受けます。興味深いのは悪魔ではなくサタンがイエスさまのところに戻ってくるのではなく、今度はユダの中に入り(22章3節参照)、人々は闇の力に支配されてしまいます(22章53節参照)。悪魔(サタン)は、イエスさまから離れますが活動を止めていたのではなく、引き続き人々のところに入り込もうとしています(4章33-35、41節他参照)。サタンも同様です(10章18節参照)。

ところで、「誘惑」と訳されたことばはギリシア語でペイラスモスですが、これは「試練」とも訳されます。「誘惑」は悪魔がイエスさまを神さまから引き離すために、イエスさまに与えられました。それは苦しみを伴います。しかし、イエスさまは父なる神さまとの深い信頼関係を得るために荒野での40日間の苦しみを通して「試練」を経験したのです。神さまに仕える生き方をする人にとって「誘惑」は「試練」へと変わるのです。そのためには「神のみことば」に頼るしかないのです。イエスさまと同じように。